

日蓮大聖人が末法の導師 上行菩薩

布教部長 村松潮隆

絵 藤田由也

日蓮末法まつぼうに生れて上行じようぎやう菩薩ぼさつの弘め給ふべき所の妙法を先立さきだちて粗はざひろめ、つくりあらはし給ふべき本門ほんもん寿量品じゆりやうほんの古仏こぶつたる釈迦しやくか仏ぶつ、迹門あらかん宝塔品ほうとうほんの時とき涌出ゆじゆつし給ふ多宝たほう仏ぶつ、涌出品ゆじゆつほんの時出現じゆげんし給ふ地涌ぢゆうの菩薩ぼさつ等をまづ作り躰あらはしたてまつる事こと、予よが分齊ぶんさいにはいみじき事なり。日蓮をこそにくむとも内証ないしやうにはいかが及およばん。さればかゝる日蓮を此島このまで遠流おんるしける罪つみ無量むりやう劫こくにもきへぬべしとおぼへず。譬喩ひゆ品ほんに云く「若もし其そのの罪つみを説とかんに劫こくを窮きわむとも尽つきじ」とは是これなり。又また日蓮をも供養くやうし、又日蓮が弟子でし檀那だんなとなり給ふ事、其その功德くどくをば仏の智慧ちえにてもはかりつくし給ふべからず。經きやうに云く「仏の智慧を以て多少を籌量ちゆうりやうすとも其そのの辺へを得えじ」といへり。地涌ぢゆうの菩薩ぼさつのさきがけ日蓮一人なり。地涌ぢゆうの菩薩ぼさつのかずにもや入りなまじ。若もし日蓮地涌ぢゆの菩薩ぼさつのかずに入らば、あに日蓮が弟子だんな檀那だんな地涌ぢゆの流類るるいにあらずや。經きやうに云く「能よく窈ひそかに一人いちにんの爲ためにも法華經ほふけきやうの乃至なほ一句いっくを説かん。当まさに知るべし是この人は則すなわち如来にがひの使つかいなり。如来にがひの所遣しよけんとして如来にがひの事じを行ぎやうずるなり」あに(豈いかで)別人べつじんの事ことを説たまき給たまふならんや。

【語句の意味】

末法まつぽう 法ほう 法ほう お釈迦様 滅後、二千年以後の時代。

上行菩薩じやうぎやうぼさつ 妙法蓮華經 從地涌出品第十五

に説かれる地中から涌き出た菩薩達の最上

位の代表菩薩。

弘め給ふべき 弘ひろめ 給たまふ べき 広められるべき。

先立て粗ひろめ 先さき立て 粗ぼろひろめ 率先して おおかた 広めた。

つくりあらはし給ふべき (上行菩薩が) 作り現

わされるべき。

本門寿量品の古仏たる釈迦仏 本ほん門 寿じゆ量りやう品ひんの 古こ仏ぶつたる 釈しや迦か仏ぶつ 法華經後半の「如

來寿量品第十六」に著わされた久遠実成本

師釈迦牟尼仏のこと。

迹門宝塔品の時 法華經前半の「妙法蓮華經見宝

塔品第十一」に著わされた、という意味。

涌出し給ふ多宝仏 涌ゆじゆつし 給たまふ 多た宝ぼう仏ぶつ 地中より出現した多宝塔と多

宝仏。

涌出品の時 出現し給ふ地涌の菩薩等 涌ゆじゆつ品ひんの時 出しゆ現げんし 給たまふ 地じ涌ゆの 菩ぼ薩さつ等とう 妙法蓮

華經從地涌出品第十五」で地中より出現し

た無数の菩薩たち。

まづ作り 最初に、 おおよそ作った。

顕はしたてまつる事 現わした事。

予が分齊には いみじき事なり 私の身の程では、

もつたいない事である。

こそにくむとも 特に憎んでも。「こそ」は強調

の語。

内証には いか及ばん 悟りには、

到底 及ばない。

さればかゝる ですからこのような。

遠流しける罪 流罪にした過ち。

無量劫 数えられない年月。

きへぬべしともおぼへず 消えるとは思えない。

消えない。

譬喩品に云く 妙法蓮華經譬喩品第三」に言わ

れている・書かれている。

罪を説かんに 罪を説明するならば。

劫を窮むとも 尽じ どれ程の年月を経ても無くな

らない。

檀 那 布施をする信徒・信者。



はかりつくし給ふべからず〓考え尽くせない。

知り尽くせない。

多 少〓幾らなのか。

籌量すとも〓量を計り計算しても。

辺を得じ〓ほとりに辿り着かない。分からない。

さきがけ〓始めとなること。先駆者。

入りなまじ〓入っているのではなかるうか。

地涌の流類にあらずや〓地涌の菩薩の仲間ではな

いか。

経に云く〓お経に説かれている。ここでは「法師

品第十」を指す。

能く窺かに〓上手に人知れず。

乃至一句〓あるいは一言。

説かん〓説明する。

当に知るべし〓間違はなく理解しなさい。

所遣〓遣わした所。遣いの者。

事を行ずる〓仕事を行う。

あに(豈)〓決して。何も。

説き給ふならんや。説かれたのだからか。ここで
は「説かれたのではない」。

【現代語にしてみる】

日蓮は末法の時代に生まれ、上行菩薩が広めるべき『妙法蓮華經』を、率先しておおかた広め、また上行菩薩が作り現わされるはずの法華經本門の「如来寿命品第十六」に説かれている久遠実成本師釈迦牟尼仏、法華經迹門の「見宝塔品第十一」で地中より出現した多宝塔と多宝如来、「從地涌出品第十五」で地の中より涌き出してきた地涌の菩薩達を、作り現わした（＝大曼荼羅御本尊）ことは、日蓮の身分としては身に余る光榮なことです。

日蓮を特別に憎み非難する者も、日蓮が悟った仏教の真理には到底及びません。ですから、このように日蓮を佐渡島に遠島した罪は重く、どんなに長い年月を経ても消えることは無いでしょう。

法華經「譬喻品第三」の「もし、その罪を説くなら

らば、劫を究むるも尽きじ」とはこの事です。

また逆に、日蓮に供養し、また日蓮の弟子・信徒となられた方々の功德は、何もかも分かるはずの仏の智慧をもつてしても、計り知ることはできないでしょう。それを法華經「藥王菩薩本事品第二十三」に「仏の智慧を以て多少を籌量すともその辺を得べからず」と説かれています。

地涌の菩薩によつて広められるべき法華經を、日蓮一人、先駆者となつて広めているのですから、日蓮は地涌の菩薩の一員なのではないでしょうか。もし日蓮が地涌の菩薩の一員であるならば、弟子・信徒も皆、おなじ地涌の菩薩です。

法華經「法師品第十」に「能くひそかに一人の為に法華經の乃至一句を説かば、当に知るべし是の人は則ち如来の使なり。如来の所遣として如来の事を行ずるなり」と述べられているのは、決して他宗の信徒ではなく、我々日蓮門下のことを指しているのです。

— 続く —